

五の君

泉鏡花作

其 一

今もなほ朽ちず、高崇寺の門は其門に帯を釣り
て縊れ死したる老人ありしを以て、縣下に聞えたり。
門内廣ければ、近隣の少年等の此處を遊びどころ
となしたれども、黄昏まで居たるはなし。物の怪あ
りなど、人のおとしたれば恐れてなりき。

其寺に養はれたまひしかば、尼君、尼君と皆陰に
ては囁きたれど、まことは舊藩主菅氏の第五の姫
にて、香折と呼ばれ給へる君なり。

八歳九歳のころは男女をわかたず、學校はひとつ
教場なりし、位高き方といふにぞ皆彼の君を隔て
參らせつ、席のならばいたるも多くものいふことあら
ざりき。

ある時、前の卓子に居たる貧家の兒、習字の時間

に、墨のあまり堅ければとて、水に灰を交せて摺りたるを、監生といふものに発見され太く罵られて泣きたりしに、姫の哀れとや見たまひけむ、御持料なる貴き墨を渠に與へむとのたまひぬ。

「いゝえ、いゝえ。」

とばかり臆して手をだに出さむとせざりし。姫は傍なる附添の腰元を顧み給へり。

「それをお遣はしになりますと、今日姫様のおつかひ遊ばすのがございません。明日に遊ばし、他のをもつて来てやりますから。」

と腰元は低聲にすかしぬ。姫はかぶりを振り給ひて、

「二ツに、わけて。」と強ひ給ふ。

「ま、およろしいではございませんか、お折り遊ばしては勿體なうございます。」

腰元はなほ肯ぜざりき。姫はものをものたまはで、御顔 颯とあかうなりぬ。

「可い！」と少しく聲鋭く、直ちに墨の兩端を取りて、ひしと壓させたまひしが、力足らで折れざりき。

腰元は手を束ねて見たり。

姫は傍なる少女に向ひて、

「折つて、折つて。」

と言ひかけつゝ件の墨を推着け給ふに、少女は諾ひて取らむとせしが、腰元のソと目づかひしたれば、心後れて手を控へぬ。

いひがひなしとや、姫は苛立ち給へる状にて、卓子の上にありあはす一個水晶の罫算の扇の形に造りたるを取りあげて、頷きつゝ、墨を硯にもたせかけ、斜にしたる只中を力を籠めて丁と打てば、墨の三段に折るゝとともに、水晶の罫算なかばより砕けて散りぬ。

腰元は興覺顔なり。

姫は嬉しげに微笑みて、一片を渠に、他の一片を禮心にや少女にたまひぬ。かくて後渠等は打とけて隔てなくものいひ交すやうにぞなりたる。姫は不思議のものずきにて、其ことのありてより、取かへ引かへ持ち來給ふ墨といふ墨は残らず隙だにあれば打

折^をりて、二ツにし、三ツにし、四ツにし、果^はは二三
分^ぶばかりになしては、人^{ひと}に分^{わか}たるゝこともあり、は
た濃^こき墨^{すみ}の膠^{にかは}の氣^きを以^もて一^{ひと}ツ一^{ひと}ツ繼^つぎあはせては丁^{てい}
寧^ねに日^ひに乾^{かわ}かし、かたまるを待^まちてまたつかふこと
あるなど、癖^{くせ}のやうになりたまひき。

其二

御寺に育ち給ひしかば、うまれつき心ざまの雄々しきにも似たまはず、ものの情は知りたまひぬ。

五月兩晴れし夕なりき。姫はお居室の障子を開きて、欄干に凭れ俯して、庭なる池を見たまひぬ。池は瓢の形したるに、石の反橋かゝりたり。其下あたり燕子花咲き亂れつ。水を限れる築山には、石燈籠に苔蒸して、幹は低けれど枝曲りて風情をかしき五葉松の笠の形したる下、残の躑躅ちり／＼なり。山吹もすがれながら七重八重伏しかさなる、雨上りの水さゝ濁りて、葉の雫ほた／＼と落つるごとに、緋鯉など驚き跳ぬる。

空は處々晴れたれど、夕榮もせで暮れて行く、御背には早や灯のとりたるを、姫はなほ懸念なく池の面を見入りておはす。本堂にて撞き鳴せる鐘の響のやみたるトタンに一尾の鯉あり、撥と跳ねて、三尺ばかり飛上れる、鱗きらりとかがやきし、勢あまりて築山の裾なる土に横はりぬ。

「あれ。」と腰元立上る。

姫は見返りて呼留たまひ、

「うつちやつて置き。」

「でも姫様、はやく水中へ入れてつかはしませ

ぬと、姫様。」

腰元の急き立つを、姫は極めて落着きつゝ、

「自分の勝手ではないか。」

とて髪一筋も動かし給はず、冷然として居給へり。

いつも御氣にもとれるあとの良きことなきを知りた

れば、腰元は心ならずも手を空しうして、たゞあは

れとのみぞ。

鯉は動かず、風なく、音なく、雫も小止み、水の

輪も其時消えつゝ、庭一面に立蔽へる、沈々たる

黄昏の、ものに觸れて動くと思れば、一頭茶褐色の

鼬あり、細長き胴を蛇らし來りて、矢庭に鯉に齒を

懸けり。一目見て、あと打叫びたまひし姫の、咄

嗟に欄干より身を躍らし、腰元の魂消る隙に、ざん

ぶと、池に飛入り給へり。

鼬を追はむと思してなるべし。あまりにことの急

なりしかば、縁側にめぐり出でて、庭に下りて行く
ひまには、と心あわて給ひけむ、腰元はアツケに取
られて、あれよ／＼とたゞ騒ぎつ。

やがて聲をあげて人を呼び、雪洞あちこち入交ひ
て、露地に庭下駄の音けたましや、紅の裳、白
き脛、池のめぐりに走せ寄る頃は、融も失せて鯉も
見えず、姫は濡れしをれて彳みたまひぬ。

御いきづかひやゝ忙しかりしのみ、顔の色常の如
く平然として居給ひぬ。お附の人胸をなでて、御あ
まはりを取圍み、

「まあおそばにおつき申して居ながら勿體ないこ
とをおさせ申して、ひよつともし、お怪我でも遊ば
したら何うなさいます、あなた飛んでもない。」

と年嵩なるにたしなめられ、心弱き腰元の泣ぐみ
てわびたるを、姫の笑止と御覧じて、

「うつかりして。わたしが悪いの、お叱りでな
い。」

とのたまふはしに、背よりそと搔抱き、御居室に
連れ戻り、おぐしを直せ、おめしかへと、一しきり

騒さわぎてのち、ものに紛まぎれておくれたる、ゆふかげの
膳ぜんを參まゐらすれば、むかうづけの尾頭をかしらを見給みたまふより色
をかへて、みぶるひをしたまひしが、それより形かたちの
そなはりたる魚うをは、箸はしをもつけたまはぬやうなりゆ
きぬ。

其 三

築地の外は山續きにて水は澄めれど古き池なり。

逢魔時に麗なる御身の端居しておはしたれば、もの魅入りしや、などひそめきあひて、其後は皆注意しつ。夕になれば相戒めて縁近くもいだし参らせず。

しばし何事もなく過ぎたり。晝は起居の活潑にわたらせたまへど、夜に入れば御心静に、もの書き、文を読みなどしたまふ。今宵は思ひたちたまふことあり。御手習にもなればとて、普門品を寫し給ひき。

お居室の時計九時を打ども、なほ臥床に就き給はず、籠行燈あか／＼と頭近く引寄せつゝ傍目も觸らでぞおはしたる、御目をばつと遮る蟲あり、驚きてひかへ給ふ筆のあたりに羽ばたきして、寫しかけの紙の上に足を留めてしづまりぬ。

螢よりはやゝ大なる身の、頭は蜻蛉に似て小さき

蟲なり。短き太き髻二筋いかめしう左右に分れて生
ひ、総體黒味がちの褐色にて、羽がまへの巖乗なる
を、姫の見たまひて二度ばかり呼吸をかけて吹やら
むとしたりしが、動くべくもあらざれば、筆の軸を
打返して拂ひ落とし給ひしに、忽ち飛びて障子にあた
り、衝と引返して行燈に羽音を立てしが見えずなり
ぬ。

其まゝ筆を運び給ふ。やゝありて御机の、向うて
左の隅の方より彼の蟲のそ／＼と這出でて罫算の上
にのぼりたるを、再び筆もて搔退け給へば、はたと
疊の上に落ちて、机の脚に形を隠しつ。

間もなく膝下よりぱつとたちて、お顔をば掠めて
飛びて、やがて机の上にぞ乗りける。

爾時筆を擱き給ひ、御膝に手を置きて、ぢつと打
まもり給ひし目を、傍なる腰元に見へルビむ》一
向けつゝ、

「うるさい、うるさい。」と續けて仰する。

「は。」

と腰元はゐざり寄りて、

「おや、何處から入りましたでございませう。只今取棄てますでございます。」

腰元は火箸を取りて然も氣味わるげに挟みかけしが、其さきの觸るゝとともに、彼の蟲の動くにつれて、おのが身も動けば手の震ひて、左右なくは押へ得ざりし、やがてのことなり、不意に蟲の飛びたるにぞ、あれと背後ざまに身をそらしてフト立てる袖のあふりに、行燈の灯をはたき消しつ。

ひたすら恐入りて狼狽し、裾音を立てながら闇夜の中を慌てまはり、何とも別たず搔探る手の、姫の御袖に觸れたるに、膽を冷して、

「只、今、只、今。」

と震聲。お次の人のあかしもて急ぎ入りたる、ひかげに顔を照されて、腰元はおど／＼して、消えも失せたくひれふしぬ。

姫は微笑みたまひしのみ、人の怪みてうかゞひたるには、何事をものたまはで、

「灯を。」とばかり點けなほさせ、静に又ものを
書き給ひぬ。

ことなければ人は去りたり。腰元はやゝありて、
おづ／＼頭をもたげしが、

「おや」と思はず眩きぬ。蟲はまた行燈の柱をぞ
つたひたる。

「あゝれ。嫌な、まあ、嫌な蟲だよ。」

腰元は遠くより袂を以て拂ひしに、忽ち蟲の狂ひ
出でて、障子ともいはず、壁ともいはず、どんとあ
ちこちぶつかりては、バサと飛び、くるりと撥ね、
縦横にめまぐるしく、居まはり狭う立ちまはるに、
さきより身動きもしたまはざりし、姫の眉キと動き、
流星の如きおん目を睜りて、八々と其方をねめたま
ひし。

其 四

姫はあまりうるさくに、折から蟲の羽を休めて疊の上に居すくみたるを、恐氣もなう指以て抓みて、棄てよと腰元に差着け給ひぬ。

懐紙にて恐る／＼受け參らせ、押ひねりて、ソと捻ぢて、

「嫌な蟲つたらない！、もう／＼／＼二度と來てはなりませんよ。」池にのぞみたる雨戸をすかして、腰元ははふりすてつ。

「もうよろしうございます。」

「何といふ蟲？」

「つい存じませぬが。」

「さう。」

とばかり姫はのたまひすてて、また餘念もなくも
の書き給へり。

「餘りお詰め遊ばしてはおからだの毒になります。
もうお休み遊ばしませんか。」

「あゝ。」

「それでは一寸お床をのべて參じます。」

と腰元はまかんでぬ。

しきり鳴く蛙の聲、速きこえてもの淋しく、襖のたてつけかたりと鳴りて、兩の音はら／＼と池にたばしる。姫は筆をさしおきて、ひらきたる經を閉ぢ、罫算を傍に取りのけて、うつしもの紙をずらし給ふ。其下に又こそ居たれ。いかにして何時の間にか來りけむ、見給へば同一蟲なり。

まじろぎもし給はで、瞻りたまへる眉逆立ち、見る／＼氣色ばむ御顔の色蒼くなりつ。矢庭に蟲の胴に、頭に、左右の指を懸け給ひて、キキ、と絲切齒をかみ鳴し、唇をふるはせたまひし、ものゝはずみは希有なるものかな。蟲のむくろはのけざまに眞黒なる腹を見せて、挨拶離れたる頭の髻、心ばかり蠢きぬ。

やゝありて上を下、水よ薬よとて立騒ぎつ。それより御枕あがらせ給はず。あくる日も人心地なく惱み給ふに、醫師も首を傾けたり。附人等安き心も無くてあるに、一人の一不圖へふ

と《心着きしは、かつて姫の救ひ給ひし鯉の、今もなほ恙なくて、朝曇夕凧の折々には、悠々と浮び出で、泰に一わたり水を掻きては藻を潜りて沈み行くが、日に月に大きくて、このごろは八ヤ二尺あまりにもなりたらむ、たゞ其片目は盲ひたり。鼯にかげられし齒の痕の毒に因りて然はなりぬと、人々のいひあへる。これにぞおもひあたりて、
「何うでせう、あの怨念を一つ鯉にくはしたらば。」と屈託のなかへ打出しぬ。

「だつて、もう死骸はうつちやつたではありませんせんか。」

「いゝえ、處がね、ちゃんとお手筆筒の引出に、紙にくるんで錠をおろしてしまつてあるの。」

「あら、嫌だ。まあ何だつてそんなものを。」

「其がね、斯なの。一度うつちやつてしまつただけれど、姫様が何處へ行つたノ、といつてお氣にお懸け遊ばすから棄てましたと申したらばね、さあ、大變、あすこに居る、こゝへ來たといつて夢中でお騒ぎ遊ばすもんだから、相談して又拾つて來たの。」

首だけの別個さ。これんばかりな蟲の癖に、また變な處からちぎれたもんだね。而して改めてお目にか

けて、お身には決して着きませんと申上げると、少しお氣が休まつたわね。それで、あすこへ入れて錠をおろして置けとおっしゃるので、何でもお心の休まるやうにと、だいじにしてしまつてあるの。」

「それぢやあなるほど、思ひつきだ。屹と御恩を返すでせうよ、姫様は、あのめツかちの仙人には、

命の親でおいで遊ばすから。」

其五

明治十五年の春は姫早や十六にならせ給へり。

さきをとゞしあたりより學校には出だし參らせず、然るべき婦人の心ざま正しくて、學の道に長けたるを保母として附け置きぬ。

見附の本堂の扉の陰に、半ば其姿を見せて、繡珍の帯胸高に、打紐の带上凜々しう、襲着の裋引緊りて、白綾の衣紋正しく、ふさ／＼とある黒髪を夜會結に引結へる、細面の色白く、眉つきの屹としたるぞ其の保母なりける。

姫は腰元等と打群れて、門内なる鐘撞堂の傍の一條の小川流るゝあたりに、保母が守護の届くかきりを、彼方此方追羽根して遊げ給ふ。不斷もあるを、松の内のけふ五日、御姿の端麗なる、これを何にかたとふべき。

姫はへだて給はねど、振袖詰袖打かこふ御あたりの神々しく、うまれつき備はりたまふ威にうたれて、

界隈の女子たち、嘗て學校をともしたるも、われ
と控へて近よらず。恐しきもの見るらむ氣勢して、
遠く門外に退ぎながら、群れつゝ此方を透すもあり。
行交ふ壮佼ども耳打して人知れず此方を指すは、花
の名を知らぬなるべし。舊藩士の年老いて、頭に尚
白髪結ひたる昔氣質の人などは、あれを五の君よ、
香折姫よと思ふから、佛には然もなくて、恭しく
伏拝みて通るもありき。

然るに、貴きと、賤きと、世界を分けたるこの御
寺の門の高き敷居を、足もとの危なげながら、無雜
作に、怯めずに入り來る老人あり。

「屑はごさい、屑は、屑は、屑家でごさい。」
と呼懸けつ。

折から日脚傾きて、松立てたるあたりには烟薄く
立ちわたり、空高う凧のうなりの一際さゆるもの
さびぬ。屑家は足の重たげに、吐くいき忙しく喘ぐ
に似ず、荷へる籠の中空しく、肩の骨尖りたるが、
薄着に著くいた／＼しげに、腰も屈めば丈低き、年
紀六十を越えたるべし。

「屑や、屑や。」

と呼びながら身を捻向けて今入りたる、門の前を睨め廻しつ。

「何でえ、何でえ、何をいやがるんでえ。姫様が何でえ。商賣だ、屑を買ひに入るが何うした。うぬら禄をもらつたら姫様でもな、おらあ平民だい、塵木ツ葉も殿様の世話にやあならねえ。平民だい、足輕ぢやあねえぞ。留めるならとめて見る、極道め。」

「屑家、屑家でござい。」

蹠跟とあるきつゝ又呟きぬ。

「人おもしろくもねえ、勝手にしやあがれ。氣にくはねえけりや殺すがいゝやい、ざまあねえ。」

親仁は絶ず獨言して、思ひ出したるやう調子高に、屑家と時々聲立てつゝ、地をみつめてよたよたと歩を移して、思はず、羽子の線を切つて通る、腰元の手より今羽根はひら／＼と空をまひて、姫の方に渡りたるを、受けむとせられし羽子板の、其妨げにツトそれて、はずみをくれて流に落ちぬ。

「誰！」

と見たまひ、

「いやな。」と姫は羽子板もて、屑家の胸を突き
退けたまひし、氣象の力籠りけむ、餓ゑたる者の
意氣地も無う、後ざまに怪し飛びつ。よろ／＼とし
て踏こたへし、屑家はいかに口惜かりけむ、赤き毗
を目争きて、底光りする瞳凄く、姫を屹と睨まへ
たる、睫毛に涙つたひしが、やゝありてニタリと笑
ひ、くるりとあちらむきて、門を出でたり。

其六

姫は目じろぎもしたまはで、屑家に顔を睨められながら、石に化へして立ち給ひし。其立去るを御覧じて、引着けらるゝかの如くする／＼と歩を移して、親仁のあとを追はれしが、一不圖へふと門際に立停まりて、此方をば見も返らぬ、屑家の背形を見送り給ひつ。

腰元呆れて視つむれば、姫はお手より、にらす如く羽子板を落したまひ、一文字に本堂まで傍目もふらず馳せ返りて、
「關。」と其名を呼びかけながら、すらりとした保母の腰に、犇と縋りて御顔を、渠が胸にあて給ひぬ。御ありさまのたゞならぬに、關は胸を打ちて、はつとばかり、背搔さすり參らせながら、
「姫様、何う遊ばしました。屑家が何ぞ申しましたか。え、え、姫様。」
と口忙しく、問ひ慰む。

「あやまつて、あやまつて。」と息の下にてのた

まひぬ。

腰元こしもとハルビラハルビラ一等いちとう來り集きたつどひて、しか／＼のよし物語ものがたれり。

「あれはあなた、名代なだいのもう酷ひどい因業いんごうハルビ ぢゞいい一爺いちぢやうでござんすの。舊もとは金持かねもちだつたツて言いひますが、何どうせあの根性こんじやうです。然さうかといつて、何なにも悪あいことをいたしたんぢやあないんでせうけれど、頑固くわんこで、恐おそしい強情がつじやうで、あゝして屑家くじやをして居ゐりましてもね、あなた無愛想ぶあいそうのなんのツて、これはいくらいくらといふのを、もう少すこしお買かひといへば、ふいと行いつてしまふんださうではございせんか。それで誰だれもあひてにはいたしません。からもうひどい困窮こんきゆう者もので。米屋こめやだの、薪屋まきやだのが、きびしく催促さいそくでもしようもんなら、手前てまえの軒のきで首くびを釣つるから然さう思おもへツて、恐おそしい顔かほをして睨にらみますつて。」

「恐おっかな いやうだねえ。」

「それから役場やくばからね、あなた、戸籍割こせきわりなんか取りに行いらつしやるお役人やくにんが困こまるんださうでございませよ。いくら滞とどますか知しれないもんですから、財産さんをね、處分しよぶんするてツて申もうしますと、そんな事ことが出で

来るならして見るがいゝ、おのれ、うちへ火をつけ
て、町中焼きまくつて遣るからツて、もう無茶なん
ですね。どうしてあれですもの。ひよツとすると、
為兼ねまいだらうぢやあございませんか。それです
から係りの人が少しづゝ出あひで、おかみの帳面
前を合せますとさ。」

「いやな老爺だねえ。罰あたりが、姫様を睨んで
さ。親を睨むと鰈になるツていひますから、あいつ
はいまに比良目にでもなりませうや。」

「姫様、何をおむづかり遊ばします。もう堪忍し
ておやり遊ばせな。そのかはり罰があたりますか
ら。」

と取違へてすかすもありき。

「關は腰元の言ふことを、無言にて前より聞きたり
しが、頷きて打微笑み、少し肩を斜めにして、わが
胸に埋めたまへる姫の顔差覗き、

「これは、ようお心着き遊ばした。すぐお使をつ
かはしませう。」

「いゝえ。」

「はい、それでは私がおわびを申しに参りませうか。」

「いゝえ、お前一所に来て。わたしが行かう。」

とのたまひかけて、涙の御目に見上げたまひぬ。

關はしばらく考へしが、

「すぐ、お腕車を。」

と顧みて腰元たちに命じたり。破格のおんおぼし

たちに心なき婢女ども、驚きしは、道理にこそ。

其七

姫まづ戸口を出でたまへば、關は後に續きて出でたり。御車をば早や引寄せつ。車夫は蹴込を拂ひて待ちぬ。此のあたりは町の場末にて、小家あまた建續きたる、人々皆お姿を拝まむとて、軒にイむさへ數多きに、通がかりの禮者、羽織袴にて、萬歳、烏帽子素袍にて、半被股引なるもあり、兒を背に負へるもの、孫の手を曳けるもの、用を抱へて居るものまで、所狭く集ひたるが、姫出給ふと見るよりも、人波うつて颯と別れて、後前に除けたる路を、三間ばかりお歩行にて、御車近くぞ寄り給ふ。

少しおくれて煤黒き破屋の内より、よぼ／＼出でたるは屑家なり。

見るから身のまはりに殺氣失せて、恐しかりし相好破れつ。笑ひたき、泣きたき、物いひたき、得も言はれざる面色にて、小腰を屈めて這ふが如くあとに跟きて出來れり。

「召しまし。」

と關の申して、ソと御帶に手を懸けて、扶け乗せ
參らす時、車夫は土に手を着きぬ。

慥る處へ人押分けて、小走りに女一人、小包小脇
に抱へたるが、うる／＼と來懸つゝ、それ
と控へて躊躇ひたり。屑家は見るより兩手を上げ
て、

「おう、雪か。ちやつと／＼。」

「あい、あい。」と進み寄るを、老夫は傍に引き
つけつゝ、笑傾けて、頭をさげ、

「え／＼、これが、唯今申しました一人の娘で
ござりまする。はい、な、な、何分よろしく、この
かたさへ着きますれば、もうお年貢が納まります
る。」

といふ聲震ふばかりなり。

「いゝ、お兒でござんすの。」關は腕車に乗り懸
けながら、

「姫様。」とお顔を見たり。

「これ、え／＼、御挨拶を申さぬか、うるたへもの
め。」と、どぎまぎする女を老夫は叱りなです。

姫は顧みて御覽じて、

「年紀は？」

「姫様がお二つばかりお年紀上でいらつしやいま

す。

「む、」と頷きて微笑みたまへる。

御顔を屑家はつく／＼見まゐらせて、

「え、勿體ない。蟲虻同然な屑家風情が、お姫様

におつむりを下げさしました。ば、罰があたります。

罰もあたれ、ようこそ、おいで下さりまして、おわ

びなされて下さりました、あやまられまして泣きま

する。」

と心激して人目も恥ぢず、轍に老の身を投かくれ

ば、あれ、日本一の因業親仁が涙を流して泣くわ、

見よとて、どつと群集の動揺を造る、折から三人、

高崇寺より、迎ひの腰元取乗りて、腕車を飛ばして

來りしが、それと一同乗りすて、お車の左右には

ら／＼と立ちならびぬ。

姫が氣色のうら／＼かさ。花やかにさす夕日影を颯

と御色に染めたまひつ。人目の晴や、四邊まばゆう、

て
手すさみに持ちたまひ、胸むねにあてたまひたる、扇あふぎ
半なかば、押開おしひらきて、御顔おんかほにかざしたまふ時とき、梶棒かぢぼうすツ
と上あげければ、老夫らうふも女をんなも腰元こしもと等らも、再ふたびはつと首かっへ
を低たれ、見送みおくり参まゐらす敬禮けいれいを、姫ひめは目めを以もて受うけ給たま
ひつ。御後おんうしろ 姿頸つきえりしろ白しろう、銀地ぎんぢの扇あふぎきら／＼と月つきの光ひかり
の流ながるゝ如ごとく、矢やよりも疾はやく過すぎ給たまひぬ。

【 完 】